

私立中学・高校長として感ずること ― 今の中等教育のどこに難があるのか

久留米大学附設中学・高等学校長 (九州大学名誉教授)

吉川 敦

今回の「数学教育の会」は日程的に不可能ではないが、欠席する。参加者にはご迷惑だろうが、代わりに、標題のコメントをお送りしたい。

1. 主たる数学者は「ゆとり教育」に猛反対であったし、また、いわゆる進学校は「ゆとり教育」を形骸化する方向での努力を惜しまなかった。しかし、今、筆者は、中等教育の現場に近いところに居て、ここには「ゆとり」が必要であることを痛感する。だが、このことは、かつての文部省の「ゆとり教育」政策を懐かしむものでも、また、支持するものでもない。当局者が問題点に気づいていながら、全く見当の違った施策で対処したことを残念に思うものである。
2. 中等教育の現場近くの観察では、中等教育一般に余裕がないこと、さらに、私立進学校のように、週6日制で授業を行っている場合は、教員側にも生徒側にも、授業内容そのものを、本来の意味で、消化し熟成する時間が皆無になっていることに愕然とする¹。この場合は、たまたま生徒たちの資質に甘えているために欠陥が全面的には露呈していないだけかも知れないのである。
3. このような忙しさ、慌ただしさは、今に始まったことではないにしても、決して望ましいことではない。このことは改めて指摘する必要もなからう。中等教育の理想とすべき目標を確保するためにこそ、このような余裕のなさの拠って来る所以の分析を正確に行わなければならなかったのだが、その点に不備があったようである。かくて、「余裕のなさ＝時間数の過多」という軽薄な判断が下され、それに基づいて、時間数削減を優先し、したがって、教育内容の縮小という教育の本来目的とも齟齬の恐れが多い「ゆとり教育」という政策が導入されてしまったわけである。

¹ つまり、変転激しい今後の世界での「生きる力」の十二分な涵養になっているかどうか。多分、予定調和の世界なら、これでも何とか「生きては行けるだろう」が、現実の世界は変転極まりないものである。本来は、どのような挑戦に対しても「主体的に生き抜ける」という力に一步でも近づけるようにすることが期待されているはずではないか。そのような能力が万人向きではないと承知して、偽善と紙一重のところで、「生きる力をはぐくむ」と指導要領は言っているのだろうか。この文言自体は抽象的だから、どのような政策を提案するかによって、当局者の具体的な内容解釈を読み取ることになるが、それにしても「ゆとり教育」は「生きる力」の涵養を目的として帰結されるべきものとは到底言えなかったのではないか。

4. 忙しさ、慌たらしさの本質は何か。懸命になって動き働いているとき、忙しく慌たらしいのは当然である。しかも、価値ある仕事であると確信しているときは、それでも時間が足りないと思うのが人の常であろう。中等教育の忙しさや慌たらしさは、そういう性格のものだろうか。むしろ、価値ある仕事に懸命になって勤しむための時間を奪うという、そういう効果が高いようなものではないだろうか。つまり、今の日本の中等教育は、学校で提供される学業から積極的に離れることができる時間を欠いているために、繁忙感がいたずらに強くなっているのではないだろうか。学習という業務の性格上、一定の期間、相当に忙しいのは当然であり、あるいは、仕方がないことである。しかし、一旦離れて、消化熟成の時間がなければ、せっかくの学習結果がただの知識の集積だけに終わってしまう。それどころか、獲得した知識経験を改めて整理し消化し熟成するという、特に、学校を出てから大事になる過程を発達させることが困難になる。
5. わたくしの信ずるところでは、日本の教育における忙しさや慌たらしさの解消は、全体に水増しし間延びをさせることでは実現できず、むしろ、きちんとメリハリを付けて、休むべき時に徹底的に休めることを保障できるようにして、始めて実現できるものである。現に、いろいろと改良を目指した工夫がされてきたが、すべて、空転しており、効果は上がってはいないではないか。
6. では、どうしたらよいか。手っ取り早いのは、他国で証明済みの方式であり、具体的には、日本が北半球にあることを考えると、夏季休暇が真に休暇になるように、学年と学年の境に、夏季休暇をいれることである。要するに、秋に新学年の授業を開始し、初夏に、学年の授業が終了することを基本にすればよい。夏季休暇は熟成のための期間になる。
7. 現行のものと差がありすぎるって？確かにそうだが、例えば、東京大学と京都大学の入学試験を、ある年度以降、八月前半実施、入学は九月、と宣言し、受験要件として、すでにいずれかの大学に入学している者は除くとするだけで、急激に状況は変わるのではないだろうか。かつて、東京大学の入試がなかった年があったが、それで日本が壊れたわけではなかった。やる気になれば何だってできるのである。